

今回もアメリカ・ツアー本編の続きになる。入国ではそれなりに身なりはバッチリでないと、ケチをつけられることがあるから注意する。特に足元のオシヤレは重要で、靴はこの時期に必ずおニューにする。

変わった足の形をしているな

記憶の限り過去20年間以上同じメーカーの同じサイズ、同じ色の靴を購入している。デザインは10年ほど前に少し変わったが、牛皮、防水、エアソールは快適性を追求している。購入初年度は外出用、2年目は同じ靴を日々の外靴として使い、3年目は農作業の仕用にトコトン愛用する。幅は4Eのみの選択になる。

つまり幅があるということだ。ある時、知り合いのアメリカ人と同室になって裸足になったところ、アメリカ人が私の足をのぞき込んでいた。

「ど、どした?」。彼は一言「変わった足の形をしているな」。そこで彼の足を見ると、私よりも体格が大きいのに私より小指一本分幅が狭いのだ。ん、知らなかった。股下の長さが違うのは知っていたが、足の幅まで違うとは……。自分の子どもたちの足と比べても明らかに幅が違う。やはり食生活の違いなのだろうか。何か理由があるはずだと考えた。

そこで思い出したのが柔道だ。

国際大会で白人アメリカ人の柔道は強いのは足の幅が狭いから? 武勇伝としてクラス全員に一本勝ちができたのは、踏ん張りが効いた幅広のこの足のおかげなのか。でもアヒルの足の様に広くても、泳ぎは全くできないのであまりあてにならない理論だ。

靴の世界にもグローバル化の波は押し寄せている。この靴は20年前には日本製だったが、15年ほど前から中国製になり、3年ほど前からカンボジア製になった。10年後はどこ製になっているのだろうか?

なんだその態度は! 逮捕するぞ

今回は羽田→LAXの直行便なので預けたスーツケースが出てこないという不測の事態は考えなくてもよい。しかし念のため1泊分の着替えを手荷物に入れることにした。コロン製だとかさばるので100均で使い捨ての下着を数枚買い、エマー

アメリカに行ってきた 5

Vol.125



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

ジェンシー用に持ち歩いてる。手荷物では持ち込めないが、忘れてはいけない小物がある。レザーマンのマルチパーパス工具だ。ドライバー、ヤスリ、カッター、ペンチ、キヤップ開け、スケールが付いて200gだ。普段、農作業の時は腰ベルトに装着して携帯している。注意しなければならぬことがある。ナイフの刃渡りが63mmある。つまり、国内法では60

mmを超える刃物は銃砲刀剣類所持等取締法違反になるのだ。ただ法律には「業務その他正当な理由による場合を除いて、これを携帯してはならない」とある。

20年ほど前にアメリカからこのマルチパーパス工具を持ち込む時に税関から「警察に確認しましたか?」となり地元、長沼町管轄の栗山警察署の生活安全部のフクシマさんから「お話を聞く限り、農業用であれば問題ありません」と回答をいただき、無事通過できた。

後日談がある。15年ほど前に、あるハンカクサイ、おバカとトラブルになり、居合わせた2番目の愛人(本人がそう言った)が110番して私がこのナイフ付きのマルチパーパス工具で威嚇していると通報したのだ。首に手ぬぐいを巻いた刑事とお巡りさん4人くらいがすつ飛んできた。地元では私がこの200gのマルチパーパス工具をいつも携帯していることを知っているのだ。手ぬぐい刑事が「そのポケットにある物を見せろ!」となり、ナイフ付きのマルチパーパス工具は没収の憂き目に遭った。

しかし、転んでもタダでは起きない私。従業員に電話を入れて、昨年まで使っていた使い古された同型のナイフ付きのマルチパーパス工具を

持って来てもらった。その手ぬぐい刑事に「その没収されたのは新しいので、今、従業員が持って来た古いのと交換してください。しっかりナイフも付いていますから♡」と言った。手ぬぐい刑事はなぜかご機嫌なまめになり、「なんだその態度は!逮捕するぞ」となったが、ここで怯んではなんのために農業をやっているのかを問われると考えた。警察に問い合わせたことを思い出し、「栗山警察署の回答は『農業用であれば問題ありません』と聞いていますけど何か問題でも?」で、すべて解決。ただこのナイフ付きのマルチパーパス工具は、ススキノや六本木で護身に用い携帯すると違法となる可能性がありますのでご注意ください。

アメリカの話に戻そう。羽田で出国スタンプを捺されると、そこからは金髪ブルーアイがワンサカ待つ外国だ。飛行機に乗り込むまでに1時間ほどあったので、ラウンジに立ち寄る。機内でおいしいテンダーロイン・ステーキが待っているから食事はしない。飲むものは決まっている。キンキンに冷えたグラスにタバスコを数滴注ぎトマトジュースを入れ、アクセントにレモンのスライスを入れる。あゝ恐悦至極の極みだ。また話は飛ぶことになるが、昔JALだったかANAの国内ラウンジ

使用券をもらった。驚いた。スーツを着たビジネスマン10人中9人は朝っぱらからビールを飲んでいるのだ。私はオレンジジュースだった。なぜ朝からビールを飲むことが許されるのだろうか。たばこがどうだこうだいわれるのに、ビールは体に悪くないのか? そもそもあの苦い飲み物をいつ、どの時点でビールはおいしいと感じ始めたのだろうか。

サマータイム 日本が進むべき未来

さあデルタに乗り込み、睡眠導入剤を1錠のみ、ステーキを食べ、歯を磨き、8時間寝て、目が覚めるとそこはブルースカイのカリフォルニアだ。しっかりと寝ているが、到着してもやはり時差ぼけが残る。冬期間にカリフォルニアにはサマータイムはないが、日本との時差は17時間になる。報道によると、このサマータイムは2019年に試験導入、東京オリンピックが開催される20年にも運用されるかもしれないとのことだ。

大賛成。サマータイムについてはここでは説明しない。アメリカのすべての州で運用されているわけではない。ハワイはない。なぜか? 日本ではあまり議論されないが、そこに日本の進むべき未来があると思われる。緯度が低い国はサマータイム

を導入していない。結論から言うと、サマータイムを導入しないことは、自分たちが南の文化圏の民であると、世界に発言しているようなものだ。先進国がサマータイムを導入しているのではなく、緯度が高い豊かな国が導入しているのだ。

北緯43度、長沼の夏は早くて長い。夏至のころの日の出は4時前で、19時過ぎでもしっかりと明るい。実にもったいない。2時間の時差は、時間の有効利用ができる。速やかに導入すべきだ。

明治維新から日本の文明開化が始まった。すべて日本よりも緯度が高い国から学んだことばかりである。日露、第一次大戦、第二次大戦すべて北の文化圏との戦いである。北の文化圏とやり合えないと、日本の存在理由がない。南から将来の豊かな文化を学ぶものはない。それが明白な結論だ。

一部のメデイアは3時が5時になると時差ぼけになるから体に良くない、なんてことを平気で言う。あんたは海外に行ったことはないのか? 地球が丸いことも知らないのか? まさか昼夜逆転するだけでも? DAPUMPで平成の火野正平とも称されるボーカルISSAが歌っているじゃないか「どっちかの夜は昼間♪」ってね。